



Data

監督: プライアン・シンガー
 出演: ラミ・マレック/ルーシー・ポイントン/グウィリム・リー/ベン・ハーディ/ジョー・マッゼロ/エイダン・ギレン/アレン・リーチ/トム・ホランダー/マイク・マイヤーズレイ/アーロン・マカスカ

■**ショートコメント**■

◆私は、1970～80年代に一世を風靡したバンド“クィーン”については、名前を知っているだけで特別興味がなかったため、本作の予告編を観ても「こりゃ必見!」と思わなかった。しかし、11月ごろから、なぜか日本でも本作の人气が急上昇! 新聞でもその記事が多くなり、かつての『カメラを止めるな!』(17年) (『シネマ42』17頁)の時と同じような雰囲気・・・。そのため、年末の時間的余裕がある時に『アリー スター誕生』と同時に音楽映画を2本続けて観ることに・・・。

◆私の弁護士登録は1974年。そして、独立して自分の事務所を持ったのは1979年だ。生来音楽や映画が大好きな私だったが、さすがにこの間は弁護士本業の仕事が忙しかったから、当時の音楽の情報は、女性事務員が大のファンだったアリスくらいしかなかった。

しかし、1970年はロックミュージシャン黄金期と呼ばれていたようで、レッド・ツェッペリンやイーグルス等の歴史に足跡を残したバンドが英米から次々と現れて活躍したそうだが、私は全然知らない。したがって、アメリカのロックバンド、クィーンについても名前だけしか知らなかったのは仕方ない。

ところが、本作を褒めちぎっている新聞記事を読むと、“俺はもともとクィーンが大好きだったんだ”という人の何と多いこと。しかし、それって、ホントにホント・・・?

◆本作と同時に観た『アリー スター誕生』(18年)は女性歌手レディー・ガガがブラッドリー・クーパーと共演した、まさに『スター誕生』というタイトルどおりの“音楽モノ”だったが、本作は、クィーンというロックバンドに結集した4人の男たちの“音楽モノ”であると同時に人生ドラマ。その点では、クリント・イーストウッド監督の『ジャージー・ボーイズ』(14年) (『シネマ33』290頁)と同じような映画で、確かにみどころは十分。

◆『ジャージー・ボーイズ』と同様、本作でもボーカルのフレディ（ラミ・マレック）が物語の中核を担い、恋人のメアリー（ルーシー・ポイントン）との淡い恋のストーリーも少し登場するが、何といっても興味深いのは、フレディの同性愛……？

私には、若い頃のフレディと、一流バンドになってから最後のウェンブリー・スタジアムで開かれたチャリティーコンサート「ライブエイド」で熱演する時のフレディとが同一人物に見えないのだが、さて皆さんは？そんなフレディの恋と性愛の遍歴の実態はどうだったのだろうか？多少はそんな興味もあるが、ハッキリ言ってそんなことはどうでもいいこと。ハッキリしているのは彼がエイズで亡くなったことだが、さてその理由は……？

◆わずか300万円の製作費で作られた『カメラを止めるな！』が社会現象といえるほど大ヒットしたのは面白い対象で、その原因分析が不可欠だが、本作もなぜ、それと同じように大ヒットしたの？私にはフレディの生きざまに共鳴する日本人がたくさんいるとは思えないのだが……。

◆さらに1月8日には、第76回ゴールデングローブ賞のドラマ映画部門で本作が最優秀作品賞を、また主演したラミ・マレックが最優秀男優賞を受賞したというニュースが飛び込んできたからビックリ！ゴールデングローブ賞はアカデミー賞の前哨戦と言われているから、ひょっとして本作はアカデミー賞にも……？それに注目！

2019（平成31）年1月9日記